

食事マナーを通してのコミュニケーション支援

荻野稔朗

1. はじめに

本研究は、高等部2年男子生徒の給食時におけるマナー指導を通してのコミュニケーション支援について研究したものである。

本生徒には、昨年度から給食時に牛乳の飲み方を通してコミュニケーションをすすめる取り組みがなされている。今年度も本人からの要求がより出やすい給食の場面を中心に取り組み、要求がスムーズに伝わり気持ち良く食事をとれるという成功体験を増やし、情緒が安定して学校生活を過ごしていけることを期して取り上げた。

2. 対象生徒

S男（高等部2年） 診断名 コルネリア・デ・ランゲ症候群

(1) 検査結果

KIDS 総合発達年齢 1：0（H15年7月18日）

運動 1：10 操作 1：3 理解言語 0：7 表出言語 0：7 概念 1：3

対子ども社会性 1：1 対成人社会性 0：7 しつけ 2：0 食事 1：3

(2) 実態

衣服の着脱はほぼ全介助。ズボンの上げ下ろしは、片足を入れるなどきっかけが必要ができる。時間排泄をしているが、排泄感覚（尿意）が弱いためか失敗も多い。大便のときには自分でトイレへ走って行くことが多い。

発語はなく、要求は直接行動で手を持ったり視線で伝えるが、それだけではわからないこともある。表情は豊かで、機嫌の良し悪しはわかりやすい。気分が高揚していると多動になり、あちこち探索したり、モノを引っ張り出したり落としたりすることがある。

意に反することがあるときも物を投げる、落とすなどの行動で気持ちを表す。信頼関係を築くのに時間がかかり、また相手が変わるといたずらで試したりする。やめるように言われるとなお繰り返し、叱責されるとより強い反発となって出てくる。

<給食について>

給食は食堂で担任の横に座って食べている。スプーンとフォークを使って一人で食べることができるが手づかみやわざとひっくり返すなどマナー面での課題がある。昨年度から給食時に牛乳の飲み方を通してコミュニケーションをすすめる取り組みがなされていたため昨年度の初めより食事マナーは改善されている。担任がきめ細かく接していればひっくり返すことは少なくなっているが、気に入らないことがあるとお椀を投げることもある。

3. 研究の方向

不適切な行動のなかでも給食時にお椀を投げるなどの行為は、本人もまわりの人も困ることが多い。また他の場面に比べて給食時は本人からの要求が表に出やすいということから、まず第一に対応する必要があると思われた。ここをしっかりと押さえて成功体験を増や

し情緒の安定を図ることにより、学校生活の他の場面も改善されていくと期待される。

方向としては、まずS男が出す要求をできるだけ満たし、気持ちよく食事を取れるよう配慮する。また否定的な声かけを避け情緒の安定に気をつけて取り組むようにする。

4. 給食時の支援

4月初めの給食では、口に入れた食べ物をこっそり反対側の床に落とす、牛乳やお椀を軽くひっくり返すなど、新しい担任を試す行為が見られた。叱られるとわざと物を投げることがあったので黙って片づけて様子を見ると、それ以上エスカレートすることはなかった。そこで、昨年から取り組んでいる牛乳をコップに小分けにし、コップを出して要求があったらおかわりを注ぐ、という手だてを継続して取り組むようにした。コップやお椀をひっくり返した場合は言葉で叱るとエスカレートすると思われるため、ひっくり返した食器を静かにお盆から遠ざけ、しばらく様子を見てからお盆に戻すようにした。

取り組みを継続していくうちに、日に日にこちらの反応を試すような行為は見られなくなった。ただ本人の要求をこちらが見逃したり、おかずのトンカツが硬くて食べにくいなどが原因でひっくり返すことは1学期半ばでもなくならず、給食時は気が抜けなかった。

2学期になると落ち着いて給食を食べることが多くなってきた。そこで、適切な要求の出し方を認識させるため、適切なサインにはすぐに応え、コップをたたきつけるような不適切な要求にはすぐに応えないようにした。

5. 結果

本人からの要求が出やすい給食時に取り組んできたのは有効だったと思われる。コップをそとこちらに出してくるなどおかわりのサインも適切な出し方が増え落ち着きが出てきた。スプーンやフォークをうまく使えないときにはお椀を差し出してすくって欲しいと伝えてくる。お椀をひっくり返すことも少なくなった。甘えからか繰り返し手伝って欲しいと要求してくることがあるが、自分でうまく使おうと努力する場面もよく見られ、特にフォークの使い方が上達してきた。要求がスムーズに伝わり気持ち良く食事をとれるという成功体験が増え、給食時の情緒が安定してきた成果と思われる。

6. おわりに

給食時に些細なことわざと牛乳をこぼすといったことはまだあるので、本人の要求の度合いをはかることは欠かせない。まだまだ担任が小さいサインを読みとったり本人のその時の状態や気持ちを推定していることが多く、相手の教師がかわると同じようにはいかない。だが、S男が担任から常に気持ちを察してもらえていると感じることで給食時の情緒が安定し、それが学校生活の他の場面での情緒の安定にも結びついているようである。

担任と一緒にいない授業や休み時間に友だちに誘われて遊びに行くときなどでも機嫌良くしているようである。日常的に物を投げたりすることもほとんど見られなくなってきた。また、暑い時期は回数が少なかったおしっこが、涼しい10月下旬になるとほぼ毎日出るようになってきたが、時間を見計らってトイレに誘うと毎回しっかり気張っておしっこをするようになった。少量でもほぼ確実におしっこをするので、トイレに行く回数を減らすことができ、授業時間中にトイレへ行かずに済むようになった。

このような成功体験の事例を他の教師にも随時伝えていき、S男が今後も学校生活を落ち着いて楽しく過ごし、いろいろな場面で力を伸ばしていければと思っている。